



発行所 日本聖公会 沖縄教区
〒901-2102 浦添市前田3-3-5
電話 (098) 942-1101
編集責任 教区事務所 (1部20円)

「重荷を負う者への招き」

執事 ウリエル 仲宗根 遼祐



「すべて重荷を負って苦勞している者は、わたしのもとに來なさい。あなたがたを休ませてあげよう。」(マタイ11:28)
今年の初め、私は自分が牧会を務める教会で信徒の皆さんに一つのお願いをしました。「一年間、一人の心を心に思い描いて祈り続けてください。」それは家族でも友人でも構いません。健康のためでも、日々の歩みのためでもよいです。誰かに話す必要もありません。長い祈りである必要もありません。ただ神さまの前で、その人を覚え、神様に思いを伝える時間を持っていたらいいと思います。けれども、祈り続けるということは私達

が想像している以上に難しいことです。私たちの日々は忙しく過ぎていきます。仕事や家事、人間関係や将来への不安に心を奪われ、気が付けば祈ることを忘れてしまうこともあります。祈っても何も変わらないように思えたり、自分の祈りが本当に神さまに届いているのだからかと迷ったりすることもあつていでしょう。長く教会に身を置いていても、神さまのことが分からなくなる時があります。神がおられることを疑う事は無いでしょう。しかし日々の生活や仕事に追われる中で、神さまの存在を身近に感じられなくなる瞬間が私達の中にあります。様々な事を知る中で、色々な考え方に触れる中で、「自分の信仰とは何だろう」と迷めれば求めるほど分からなく

なる。そんな経験をされた方もおられるかもしれません。それでも不思議なことに、神さまは思いがけないところで私たちに語りかけてくださいます。ある絵画に心を動かされた時。美しい音楽に耳を傾けた時。日の出の空を見上げた時。ふとした誰かの言葉に励まされた時。そんな瞬間に、「ああ、神さまは今も共にいてくださるのだ」と感じることがあります。私はここ数年、ある一人の人のために祈り続けています。その人は教会とは縁がなく、クリスチャンでもありません。しかし心に深い傷を抱えながら懸命に生きている人です。私は朝夕の礼拝の中で、その人のために祈り続けてきました。「主よ、この人を支えてください。心の傷を癒してください。」その祈りが届いているのか、私には分かりません。けれどもある日、その人がこんな言葉を口にしました。「教会のことはよく分からない。でも、あなたが信じている神さまが温かいものだ」ということは何となく感じた。」その言葉を聞いた時、私は神さまがその人の重荷を支えてくださったのかもしれないと思います。

「主イエスは「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに來なさい」と言われます。それは教会に通う人だけへの招きではありません。信仰に自信のある人だけへの招きでもありません。疲れた人、迷っている人、傷ついている人、そして祈ることさえ難しくなっている人への招きです。だからこそ私たちは、出会った人々を覚えながら祈り続けるのです。気にかけている人、身近にいる人、共に働く人、救いを求めている人、一人ひとりを覚えて神様の前でへりくだり、祈りを捧げます。その祈りは小さなものかもしれませんが、しかし神さまはその小さな祈りを通して働いてくださいます。そして私たち自身もまた、重荷を抱えた時には主のもとへ立ち帰り、神様のもとで休みます。私たちも神様によって癒され再びこの世界へと遣わされていきます。

祈り続けることは簡単なことではありません。しかし、私たちが誰かを覚えて祈るよみも先に、主ご自身がその人を覚えていてくださいます。だから私たち教会は希望を失わず祈り続けることができるのです。主の招きと慰めが、私たち一人ひとりの上に豊かにありますように。(小禄聖マタイ教会牧師補)

が想像している以上に難しいことです。私たちの日々は忙しく過ぎていきます。仕事や家事、人間関係や将来への不安に心を奪われ、気が付けば祈ることを忘れてしまうこともあります。祈っても何も変わらないように思えたり、自分の祈りが本当に神さまに届いているのだからかと迷ったりすることもあつていでしょう。長く教会に身を置いていても、神さまのことが分からなくなる時があります。神がおられることを疑う事は無いでしょう。しかし日々の生活や仕事に追われる中で、神さまの存在を身近に感じられなくなる瞬間が私達の中にあります。様々な事を知る中で、色々な考え方に触れる中で、「自分の信仰とは何だろう」と迷めれば求めるほど分からなく

なる。そんな経験をされた方もおられるかもしれません。それでも不思議なことに、神さまは思いがけないところで私たちに語りかけてくださいます。ある絵画に心を動かされた時。美しい音楽に耳を傾けた時。日の出の空を見上げた時。ふとした誰かの言葉に励まされた時。そんな瞬間に、「ああ、神さまは今も共にいてくださるのだ」と感じることがあります。私はここ数年、ある一人の人のために祈り続けています。その人は教会とは縁がなく、クリスチャンでもありません。しかし心に深い傷を抱えながら懸命に生きている人です。私は朝夕の礼拝の中で、その人のために祈り続けてきました。「主よ、この人を支えてください。心の傷を癒してください。」その祈りが届いているのか、私には分かりません。けれどもある日、その人がこんな言葉を口にしました。「教会のことはよく分からない。でも、あなたが信じている神さまが温かいものだ」ということは何となく感じた。」その言葉を聞いた時、私は神さまがその人の重荷を支えてくださったのかもしれないと思います。

「主イエスは「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに來なさい」と言われます。それは教会に通う人だけへの招きではありません。信仰に自信のある人だけへの招きでもありません。疲れた人、迷っている人、傷ついている人、そして祈ることさえ難しくなっている人への招きです。だからこそ私たちは、出会った人々を覚えながら祈り続けるのです。気にかけている人、身近にいる人、共に働く人、救いを求めている人、一人ひとりを覚えて神様の前でへりくだり、祈りを捧げます。その祈りは小さなものかもしれませんが、しかし神さまはその小さな祈りを通して働いてくださいます。そして私たち自身もまた、重荷を抱えた時には主のもとへ立ち帰り、神様のもとで休みます。私たちも神様によって癒され再びこの世界へと遣わされていきます。

祈り続けることは簡単なことではありません。しかし、私たちが誰かを覚えて祈るよみも先に、主ご自身がその人を覚えていてくださいます。だから私たち教会は希望を失わず祈り続けることができるのです。主の招きと慰めが、私たち一人ひとりの上に豊かにありますように。(小禄聖マタイ教会牧師補)

主教選挙に向けた研修会でのグループセッション時に、「王教候補はどうやって決めるのか」という話題になった。3名の推薦者によって推薦された方が候補者となるという話を聞いたある方が、「どうして立候補する人がいないのか。『私は沖縄教区をこんな風にした。』という意気込みを持った聖職はいないのか」とおっしゃった。わずかな沈黙の後、同席した司祭の一人が、主教職という重責を担う資質が自分にあるとは思えない。だから私は立候補なんてできない。おそらく他もそうなのではないかと話された。上原主教様が主教に選出された際、祝いの言葉を最初に「おっしゃったのは一僕でいいのだらうか」という言葉だった。受諾に至るまで、深い葛藤があったのだと思う。主教となつて13年。その日々の姿からは「粉骨砕身」という言葉が浮かんでくる。新たな主教を選ぶうとして今、これから共に教区の歩みを担っていく方のために祈り、また私たち自身が向かっていくという思いを持つて向き合っていきたいと思う。(A)



主教選挙・これからの沖縄教区について私たちはこう考える

十 愛楽園祈りの家教会

私たちは、6月6日(土)に教会委員会と共に話し合いの時を持ちました。

話し合いの中では「沖縄教区を大切にし、その発展のために情熱をもって宣教に取り組むことのできる人」を望む声が聞かれました。また、愛楽園祈りの家教会は、屋我地聖ルカ教会の青年たちが礼拝に参加し、教会を支えてくれていることから「若い世代が教会に集うための新しい宣教のアイディアやビジョンを持つ人」を求める意見もありました。さらに変化する時代の中にあって、沖縄教区の未来に希望を示し、教会と地域社会をつなぎながら歩むことのできる人が主教として選ばれることを願う声が寄せられました。

ますようお祈りいたします。

司祭 ドミニカ 朴美賢

十 屋我地聖ルカ教会

「主教選挙に向けて」

主教選挙を前にして、これからの沖縄教区が守られ発展していくことを願っています。その中で、私たち教会では、新しい主教への思いが話し合われました。

主教様への思いは、大きく二つです。1つ目は「若い世代への育成」、2つ目は「傾聴できる力」この二つです。

1つ目の「若い世代への育成」です。ルカ教会は信徒の半分が20代以下です。この若い世代が楽しく過ごせる教会の在り方を考え、働きかけることができる方が良いと思えます。もちろん、今までを支えてきた信徒の皆様も大切です。親から子へ、大人から若者へ繋がるその世代の手を大切に。つなぎ守っていただきたい。

ます。言葉は祈りです。信徒の言葉を祈りと受け止め聞き、共に祈りの中に在ることを覚えていただける方であつて欲しいと思います。

私たちは、他の教区の司祭様達を知りません。沖縄教区の司祭様達も関わりに大きな差があります。その中で、主教様を選ぶのですから難しい事です。人柄や経歴で選ぶ事は出来ないため、「私たちと共にこれからの沖縄教区を歩みたい」と主に祈りたいと思えます。そして、選ばれた主教様を私たちの信徒の祈りをもって支えていきたいです。

(信徒一同)

十 名護聖ヨハネ教会

「主教選挙と沖縄教区について考えること—アンケートのまとめ」

ヨハネ教会のメンバーの考えをまとめるために、アンケートを取った。6名から回答できた。以下に質問と回答を示す。質問は全部で4問であった。複数選択をした回答者がいるので、回答数合計は6名を超えている。

(次頁に続く)



マイターボックス — 主教パピエ 上原 榮正

小学校の遠足と思い違い

小学校3年生の時、バスに乗り遠足で糸満摩文仁に行きました。完成して暫くの摩文仁が丘の平和公園はだっ広いだけで、子どもが楽しんで遊べる所は何もありませんでした。バスから降りると、丘の1番上まで登り、そこでバスガイドから「黎明の塔」の説明を聞きました。塔は、1945年6月23日に、日本軍32軍の司令官牛島満中将と長勇参謀長の死を記念して建てられたとのことでした。塔の形は切腹自決を模した物というお話で、私は話を聞き、「沖縄の人を守るために戦い、待のように切腹で死んだんだ。凄い人たちだ。」と思ったものです。

更に感銘を受けたのは、「黎明の塔」から降りた崖下にある「健児の塔」に祭られた鉄血勤皇隊と呼ばれた学徒たちのお話です。「学生たちも日本軍と一緒に米軍に切り込みをし、勇猛果敢に戦い死んだ。」という話をお聞きし、格好いいと憧れたものでした。

しかし、それから30年程して、「平和」について学び始めた時のことです。ひめゆり学徒の生き残りの人たちのお話を伺い、私はとんでもない思い違いをしていたことに気づかされました。皇民化教育を受けたひめゆり学徒の人たちは、国のために死ぬこと、天皇のために命を捧げることは、名誉なことだと教えられた。でも、誰も死にたいと思っはいいなかった。暗いガマの中で願っていたことは、青い空が見たい、お母さんに会いたい、そんな些細なことだったというお話でした。「だから、教育が大事です。何を大切にするかは自分が決めることが出来る、どう生きるかも自分が決めることが許される、教育と社会が大切ですよ、上原さん。」と仰っていた元ひめゆり学徒のお言葉を思い出します。

沖縄戦終結は本土よりも遅く、9月7日の嘉手納基地での調印式の日です。6月23日「慰霊の日」は、終戦記念日ではありません。牛島長官と長参謀長の指揮官自決のために沖縄戦が終わらなくなつた日です。待のような潔い死ではなく、沖縄が捨て石とされ、更に多くの戦争犠牲者が始まつた日です。悲しみと怒りの日、平和を想う日です。

「平和を造る人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。」(マタイ5:9)

1. 主教候補をどこの教区から選びたいですか。

(回答) 沖縄教区から6名

日本聖公会他教区から2名
*沖縄教区から選びたいが多数であった。

(自由記載) 数少ない中でも主教を育てていきたい。

*この記述者は、沖縄教区から選びたいを重視した方であつたので、沖縄教区の少ない聖職の中から主教を育てたいという意図が読み取れる。

2. 主教候補者の名前が頭に浮かんでいきますか。

(回答) はい3名、いいえ2名

どちらとも言えない2名
*具体的な名前が思い浮かぶ人は、約半数であつた。

3. 主教に持つてほしいビジョンの領域

(回答) 沖縄教区6名、私たちの教会5名、私たちの信仰4名、沖縄の社会3名

(自由記載)

①政治的中立を守り、教会の個性と継続を大切にしたい。

②キリスト教の教えを多くの方に知らせてほしい。特に若者に！その為は何ができるか考えていきたい。

*教区・教会・信仰・社会に

ついてビジョンを持つてほしい。

4. その他の意見(自由記載)

①神のお導きにより、良い主教選挙ができるよう、祈っています。

②人材不足ですね。信仰を補う役割は、AIでは難しいです。「共に祈る、共に生きる」という大切なことは人にかできませんものね。

特任執事 大倉 信彦

北谷諸魂教会

「主教選挙についての考察」

沖縄教区の将来は、聖公会北谷諸魂教会にとつて非常に重要で、北谷諸魂教会は、沖縄教区の中でユニークな立場にあります。それは、私たちの宣教は、沖縄県民をはじめとする日本人だけでなく、海外からの移住者、現役の米軍人、その家族、そして米軍基地で教師などとして働く人々に対し、英語と日本語の両方で仕えることです。この宣教は、神さまの望まれる、平和で愛に満ちた世界の実現へと一歩近づき、和解という、より大きな目的を果たすためのものです。

また、会衆としての私たちの宣教は、長年にわたり拡大

してきました。これからもLGBTQIA2S+ コミュニティの人々を含め、神様の子どもたち一人ひとりが愛され、祝福され、尊ばれ、そしてリーダーシップを発揮できるキリスト教共同体であることを目指しています。

沖縄教区の次期主教にどなたが選出されたとしても、その方と教区常置委員会が、神様から与えられた私たちの特別な使命、そして聖公会として

の独自のアイデンティティを積極的に支えてくださることを私たちは願ひ、期待しています。これは、沖縄の抱える複雑な歴史的・政治的状況や、その中における米軍の役割を考慮するとき、殊更に重要なことです。

選出された代議員や指導者の方々がこの困難な時期を乗り越えようとされる中、私たちは愛する沖縄教区のために祈ります。そして、私たちが

Bishop Election Reflections: All Souls Church, Chatan

The future of the Diocese of Okinawa is very important to us here at All Souls Anglican Episcopal Church. At All Souls Church we find ourselves in a unique position in this Diocese a mission to serve not only Okinawans and Japanese, but also expatriates, active-duty American military, their families, and those serving on the US bases as teachers and in other capacities - and to do so in both English and Japanese. This mission serves the wider purpose of reconciliation so that we can create a future that moves us closer to God's dream of a peaceful and loving world. Our mission as a congregation has expanded over the years to include being a Christian community that loves, celebrates and lifts up the belovedness and leadership of all of God's children - including people in the LGBTQIA2S+ community. No matter who becomes the next Bishop of the Diocese of Okinawa, we hope and expect that the this person and the Diocesan Standing Committee will actively support All Souls Church in the particular mission that God has given us and in our unique identity as an Anglican Episcopal Church, particularly given Okinawa's complex historical and political circumstances and the US military's role in it. We pray for our beloved Diocese of Okinawa as its elected members and leaders navigate this challenging time and trust that God will guide all of us so that we can continue to be Christ's hands, feet and voice in Okinawa.

島袋諸聖徒教会

「沖縄教区の主教制度について」

来年3月をもって上原主教様が退職するにあたって2月より主教選挙及び主教制度について教区で各教会から集まり話し合いを持つてきました。学びをする前にアンケートの提出がありました。学び会をすることによって多くの方の意見が変わったと思います。学び会をした後アンケートを取って欲しかったです。

第1回目の話し合いではこれまで他教区からの移動は飛行機でなければならぬので主教様の大きな役割である「堅信式」や「巡杖」が大変だと思つてやはり沖縄は主教がいなければいけないと思つていましたが、長年教会に通つていらっしゃる話で、沖縄県が復帰する前はハワイ伝道教区であつた時、ハワイ教区から主教様が来沖したこともあつたこと。その時は、たくさん

の方々が「堅信式」を受けたと聞きました。主教様不在の時期もあつたようですが他県からもいらして下さり堅信式など、その他の行事を行い、特に不便さは感じなかったとのことでした。

第2回目の話し合いでは他県から主教に相応しい司祭を推薦し来てもらったということで、3名ほどの司祭様が上がっていました。同じように私たちが沖縄からも推薦があればいかざるを得ない状況があり、やはり司祭が不足している沖縄教区では主教不在の「伝道教区」で良いのではという意見がありました。結果として主教選挙を行わず主教不在の「伝道教区」で様子を見てよいのではということとでまとまりました。

(教会委員会)

十 首里聖アンデレ教会

「沖縄教区主教選挙と」

これからの歩み

上原主教の定年退職(2027年3月末)に伴う「主教選挙」とこれからの沖縄教区について考える」話し合いを行なつた。その席上で7月20日に予定されている次期主教選挙は推薦制で選出され、現在の段

階ですべての候補者はわからないため、当教会の方針としては、沖縄の歴史や現状を熟知した教区内からの選出を最優先としつつ、他教区からの選出も視野に入れる柔軟な姿勢が確認された。

今回の選挙の背景として、教区の厳しい現状と聖職養成の危機がある。沖縄教区は信徒数約300人を割込み、聖職数は出向含む10人の小規模体制であり、財政や独立維持に課題を抱えている。さらに神学院の学生激減による全国的な聖職者不足も深刻で、今後は無給の「特任司祭」や退職司祭との協働など、新しい聖職のあり方の検討が不可欠である。少子高齢化が進む中、今回が単独で行う最後の主教選挙になるという危惧もあり、将来の選択肢として「独立維持」「他教区との合併」「伝道教区への移行」という3つのシナリオが挙げられた。日本聖公会全体で再編の動きが進む今、次期リーダーには高い宣教力だけでなく、教区の将来的な再編までを冷静にマネジメントする手腕が求められる。

これからの宣教には、離れた信徒への働きかけや訪問、若い世代へのアプローチと

いった地道な活動が重要となる。沖縄教区の未来を左右する大切な歩みに向け、共に祈りを合わせ、支え合っていることが呼びかけられている。

(教会委員会)

十三 原聖ペテロ聖パウロ教会

日本聖公会が協働区を選択や合併・併合のうねりの中にあつて沖縄教区はこれまで通り一教区として歩んでゆくという決断をしました。私にとってはまだことの整理がつかないまま進んでいるような気がしてなりません。というのはこれからの教区のあり方についてアンケートが募られました。私自身は教区主教として相応しい方を見いだすまでその席は空けておいてもいいのではないかと、そして他教区の主教に管理していただくという考え方で、設問には同意しませんでした。しかし、今は沖縄教区の方向性を決断したことに基づいて、来る選挙の日にとのよう臨むかの課題を突きつけられています。

これまで2回の話し合いが持たれ、どのような方に主教になっていただくかについて、具体的にお名前まで挙がる段階に来ていて個人的には面食

らつてしまいました。選ぼうとしている方々は皆立派な方々でその中で是非沖縄でお勤めくださいと票を投じてもその方の教区の信徒は沖縄への転出をよしとしないでしょう。谷主教から上原主教へと引き継がれる間の管理主教時代のことや何度も繰り返された臨時教区会や管区総会での主教選挙のことが思い起こされま

す。今の状況はその時よりも更に難しくなっています。信徒一人一人が深い祈りを以て天の御声に耳を傾けてその日に備え代議員に託しましょう。

「憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜になつた助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか。」(ヘブライ4:16)

アンデレ 富本盛彦

十 豊見城聖マルコ教会

「主教選挙について考えた」

聖マルコ教会では、主教選挙について何度か話し合ってきました。4月には教区から出された、主教選挙についての資料を礼拝後全体で読み合わせしました。教会委員会の中でも話し合い、委員同士でも話題にしました。

主教選挙について話す時、多くの信徒の方が最初に出る言葉は「主教選挙はよくわからない」です。でも、それは考えていないのではなく、どうすればよいか考えるほど難しくなり、思わず口から出てしまうのです。又、今後の沖縄教区について、話すこともありません。聖マルコ教会は、聖マルコ保育園という保育施設を持って、います。なので、

沖縄教区の五つの保育園と二つの幼稚園について、これらの施設全体を考えた経営・運営方針を考える人材を配置するなど、教区が持っているものを生かす宣教を新しい主教には要望したいです。

主教候補として名前が挙がった人を、なぜ推薦するのか尋ねると「教区が、長年抱えていた問題について、粘り強く解決した実績がある」「人間としての魅力があり、人を引き付ける」等、それぞれの人が推薦理由がありました。

教区での話し合いの後、「やはり他教区から選ぶには無理があるだろうか」「沖縄教区の中から、本当になつてきたきたい聖職者を選ぶという意図も出ました。しかし、今の

沖縄教区の現状を考えると、広く人材を求めた方が良いという意見でまとまりました。

司祭 グロリア 西平 妙子

十 小禄聖マタイ教会

小禄聖マタイ教会では、主

教選に向けた歩みの一環として、毎月礼拝後に信徒同士で意見交換を行う時間を設けています。この集まりでは、教区主催の主教選に向けての懇談会に参加した信徒からの報告も共有し、その内容を踏まえながら教会としての思いや考えを分かち合っています。

話し合いの中では、新しい主教を教区内から選出するのか、あるいは教区外から迎えるのかについても意見交換が行われました。当初は教区外からの選出を望む声もありましたが、対話を重ねる中で、現時点ではどちらか一方に結論を出すのではなく、引き続き祈りと話し合いを重ねながら考えていきたいという意見が多く聞かれるようになってい

ます。また主教個人に求める資質だけでなく、沖縄教区が抱える課題や将来の宣教の在り方についても話し合っています。沖縄には本土とは異なる歴史

や文化があり、基地問題をはじめとする地域特有の課題も存在しています。そのため、沖縄の歴史的・社会的背景への理解を深めながら、沖縄における宣教の歩みを共に考え、導いてくださる主教を望むという意見も出されました。

信徒一人ひとりが教区の将来について祈りをもつて考え、新しい主教と共にどのような宣教を進めていくのかを話し合う機会となっています。今後も対話と祈りを重ねながら、主の導きを求めて歩んでいきたいと願っています。

文責：執事 仲宗根 遼祐

十 宮古聖ヤコブ教会

「主教選挙・これからの

沖縄教区について」

（教会委員会の中の懇談

）

○教区主教になってほしい人

大前提として沖縄をよく

知っている方に主教になって

ほしい。しかし信徒は他教区

や島外の聖職のことを深く知

らないので、聖職（牧師）が

推薦できると思う方にな

ってほしい。理想は教区の内

状況をよく知っている教区内

から選ぶことだが、教区内の

今の司祭はまだ若いのではな

いか。今回は経験を十分に備えた聖職を他教区からお呼びすることが良いと思う。教区主教には堅くない、楽しい（来やすい）教区・教会の雰囲気を取り入れてくれる方がいいと思う。

○これからの沖縄教区について

近隣教会と一緒にイベント

をしたり、交流したりしたこ

とが楽しかった。信徒同志の

交流が活発になる教区にな

たらいいと思う。やはり離島

は交流できる機会が限られて

おり、自分たちだけ交流でき

ていないのではないかと不安

に思うこともある。一緒に礼

拝をして、一緒に遊ぶ。「神

の家族である」ことをみんな

で実感できるような楽しい信

仰生活を送れる教区、教会で

あってほしい。

文責：司祭 岩佐 直人

○石垣キリスト教会

私は何年前かにルーテル教

会から聖公会へ移りました。

84歳になりますが、今も変わ

らず信仰生活を続けることが

できることを神さまに感謝し

ております。

聖公会に移ってから年月が

経ちましたが、主教制につい

てはまだ十分に理解している

とは言えません。しかし、礼

拝や教会生活を通して、主教が教区全体の信仰と一致を守り、多くの教会や信徒を導く大切な務めを担っておられることを少しずつ学んでいます。このたび沖縄教区で主教選挙が行われることを知り、大きな関心を持って見守っています。主教を選ぶことは単なる役職選びではなく、教区の将来と宣教の歩みに関わる大切な祈りの出来事だと思います。私たち一人ひとりが自分の考えだけでなく、神さまの心を求めながら祈ることが大切ではないでしょうか。

沖縄教区にはそれぞれの教

会に与えられた恵みと課題が

あります。その中で、聖職者

や信徒の声によく耳を傾け、

教区全体を愛をもって導き、

福音宣教の働きを支えてくだ

さる方が選ばれることを願っ

ています。

私自身はまだ学ぶことの多

い信徒の一人ですが、この主

教選挙のために祈り続けたい

と思います。神さまが最もふ

さわしい方を備え、教区を導

く良き牧者として遣わしてく

ださいますように。そして沖

縄教区のすべての教会が主に

あって一つとなり、希望を

ますよう心から願っています。

信徒代表 徳松 節子

* * *

「主教選挙、またこれから

の沖縄教区について」の思い

を書いて頂きたいと原稿を依

頼した所、どの教会も真摯に

取り組んでくださいました。

心より感謝申し上げます。

昨年度の沖縄教区の現在信

徒数は300名。内、現在堅信受

領者数は約220名です。この小

さな教区が単独教区（主教制）

として歩み続けていくために

は、信徒、教役者が心を合わせ

互いに協力し合うことが大切

ではないでしょうか。

今回掲載した各教会の様々

な思いを全教会で共有し、そ

れをもとにまた話し合い、共

考えながら、新たな沖縄教区

の歩みを形づくっていかれたら

と思います。

文責：新崎 和歌子

*このテーマについての個々

の声があれば、今後継続し

て掲載していきたいと考えて

います。どうぞ教区事務

所までお寄せください。



沖繩、九州、神戸の3教区は、2018年頃の教役者会交流を起点に宣教協働の道を探ってきた。この報告書を作成するため昔の資料まで探してみても胸が熱くなった。ただ、2020年に全世界的に流行した新型コロナウイルス感染症により影響は本当に大きかったことを改めて感じた。3教区はその変化に上手に適応し、Web担当者会議や毎月のZoomによる祈りの集いを絶やまず行い、さらなる協働の道を模索してきたのである。

この度5月12日から13日にかけて神戸教区主教座聖堂(神戸教区事務所)にて、久々の対面会議が開催された。初日は各教区の近況や内情が報告された。各教区の組織図を確認しながら、九州と神戸の両教区が新主教を迎えてからのこと、神戸教区の宣教150周年記念大会の準備状況、信徒の進学塾、召命黙想会、ランドセル祝福式といった各教区の特徴的な働きが紹介され、互いのビジョンや希望を分かち合った。40回近く実施した祈りのつどいについては、各教区の働きを知り関心を持つ場であるという本質を再確認した。ま



たお互いを招待し合い、実際に参加者がいる場合どのような支援(補助)ができるかを協議(継続)した。9月からはより多くの方々に参加していただくため、昼の時間帯の実施を試みることにした。次回7月の祈りの集いは沖繩教区が担当となる。自分たち(教

会・教区)の働きを再評価し、エネルギーを得られる集いとしたい。久しぶりの対面会議を通して、人と人が向き合い、同じ空間で同じ空気を吸って過ごすことの大切さを痛感した。祈りの集いのほかに実際に交流できる機会を増やし、今後の3教区間協

働が豊かな実を結ぶよう、祈りを合わせて歩みを進めていきたい。

司祭 イザヤ 金汀洙

今回の対面会議には神戸教区の八代智主教、遠藤洋介司祭、末永忍さん、九州教区の柴本孝夫主教、島優子司祭、久保希世子さんが参加され、沖繩教区からは上原榮正主教、金汀洙司祭、私、上原光来が委員として参加した。

この委員会は、日本聖公会第65(定期)総会において「宣教協働区・伝道教区制」という新しい宣教体制の可決に伴って設置された委員会である。

3教区がお互いの教区を理解し、支え合える関係になれるよう、また、将来的に教区合併も視野に入れた教区再編を進めるための委員会である。

1日目は夕方からの会議で、短い時間の中、今年宣教150年を迎える神戸教区の記念行事について、実施した企画、9月23日の記念礼拝や今後の企画紹介がされ

た。その後夕食、交流の時間を持つて1日目終了した。

2日目は、まず、他宣教協働区の動きや、各教区・教会で行われている行事の報告、3教区の平和礼拝についての確認が行われた。

昼食を挟み、「祈りのつどい」の今後について協議が行われ、昼の部や教会紹介に代わる企画案が話し合われた。最後に、「西日本宣教協働区の将来構想」について、3教区それぞれの「伝道教区」

「教区合併」に対する、委員

の感じている雰囲気や想いを聞いた。結論は出なかったが、西日本の現在の立ち位置、5~10年後の教会・教区の状態をデータで知ること、それらの資料が宣教を盛り上げるものとなるよう、刺激し合える関係になる事を確認した。

会場準備をしてくださった神戸教区の委員、神戸教区事務所の職員、信徒の皆様、会議を最後まで導いてくださった神様に感謝。

バプテスマのヨハネ 上原光来

公 示

日本聖公会沖繩教区第76(臨時)教区会を下記のように招集します。

救主降生2026年6月1日
日本聖公会沖繩教区教区会議長
主教 ダビデ 上原 榮正

記

日 時 2026年7月20日(月)
午前8時半より午後3時まで
場 所 日本聖公会沖繩教区センター
浦添市前田三丁目3番5号

日本聖公会法規第2条に従い、教区主教選挙を行います。

※台風等で開催不可の場合、7月25日(三原聖ペテロ聖パウロ教会)に順延致します。

書記を下記のように指名します。
書 記 司 祭 イザヤ 金 汀洙
補助書記 司 祭 マタイ 金山 昭夫
執 事 ウリエル 仲宗根遼祐

シヤローム

教区婦人会報告

皆様の希望で実現した黙想会、55名の参加がありました。神との対話の中で、挑戦・感謝・思いを伝える。問いかけと神様との時間旅行の体験となりました。

1部・礼拝のメッセージは戸塚司祭のご奉仕となりました。戸塚司祭をぜひ呼んで欲しいと多くの方々の要望があります。沖縄の地で神と人々と地域に31年間仕え、私たちを救い主イエス・キリストへと導いてくださいました。礼拝のとりなしでは、神の語りかけを聴くことで、自分の在り方が整えられます。また、神さまとの交わりを通して、あなたは、どんな形を紡ぎ出していきますか、と語ってくださいました。戸塚司祭は、信仰という形のないものを受け継いでゆくための研鑽の日々を送りました。まだ聞かえていなかったものを受け取る場所、それが神さまとの交わりです。耳を澄ませて聴くための存在として、「現在、埼玉県で神のお恵みをいただ

く生活に妻と与(あずか)つています。研修会にお招きいただき感謝致します。」と、これまでの日々とこれからの希望をお話くださいました。

2部の黙想会、ご奉仕くださったのは島しづ子先生です。メッセージは、命の尊さと命を守ることは、命の主である神からの「命の息を吹き入れられて存在への招き」を受けて、み言葉を聴くことです。

聴くことよって、たとえ障がいがあっても、弱い小さな存在にでも丁寧な耳を傾けられます。娘さんと生き抜いたからこそ、あらゆる存在に届いている神の呼びかけに気がつきました。その語りかけは、「神のよしとされる命」に神の創造の思い、それは弱さの中からの語りかけを聴く生き方が、しづ子先生の生き方にありました。そして、イエス様こそ「命の存在に」に向き合うことに、応えて生きることをされました。

弱さの中にこそ、「聴くこと」を通して生きがいが生まれます。小さき弱い命と向き合うところに、真実な自分になっていく新たな世界があることを学びました。島しづ子先生は献身を生き抜いたからこそ、神の呼びかけ、存在へ

の招き、存在を望む神のお恵みを聴いたのだと思います。私たちは、「自分」が真ん中にいて、まわりが自分を中心にして、自分に応えてくれる、仕えてくれるという人生観から、むしろ自分が問われている存在、応えなければならぬ存在として、受けとめ直していく時間でした。長い時間をかけて研ぎ澄まされた戸塚司祭・島牧師の説教には力があがり主が共におられることを強く感じることもできる、充実した時間となりました。

主に連なる私たちは、周りのクリスチャンにも支えられ祈られていることに、感謝いたします。

教区婦人会長
ハンナ 佐久川まさみ

宮古島からの参加者の声

5月23日(土)、宮古聖ヤコブ教会の婦人会のメンバー3名で参加しました。ベッテルハイムホールに着くと、戸塚司祭のお話が始まっています。

宮古島でのエピソードや、生活のいたる所でイエス様を感じる事ができる、家事の中にも神様の声を聞きながら行う事の大切さ、そしてイエス様は今も生きて働いておられる事を、み言葉を通して優しい口調と包容力のある笑顔でお話しして下さいました。

また黙想会では、島しづ子牧師のお話があり、これまでの人生の振り返りを聞き感動し、そしてあなたは大切なひとりである事を知り、回りには助け人が与えられている事を改めて知ることができました。

一人ひとりが思っている事をお話ししようという事で各グループに分かれました。私は、保育者として今思っている事や姉の認知症の話をししました。お話しをする事により、重荷が軽くなったように思い、聖霊なる神様が働いているなあと感じるようになって研修会でした。

私達が参加するにあたって、色々な配慮を下された婦人会の役員の皆様、そして神様に感謝します。

マリア 平良 安子

礼拝メッセージ、戸塚鉄也司祭の言葉に神は今も働いておられ、イエス・キリストを信じる私達と共におられます。聖書の中の異言や預言も昔あったことではなく、イエス・キリストを信じる私達に与え

られています。日常の生活の中でも主は働いて私達を導いておられるメッセージを聞きながら主に感謝しました。

黙想会では、島しづ子牧師の証を聞きながら聖書の聖句、詩編133:1「見よ、兄弟が共に座っている。なんといい恵み、なんといい喜び。」という聖句を思い出しました。

証の後、グループに分かれて6人で自分が思っていること、お話ししたいことを自由に5分ほどお話しする事を経験して、宮古聖ヤコブ教会でも取り入れたいと思いました。

聖ヤコブ教会から3人の婦人会メンバーが参加しました。戸塚司祭のお話しを聞いてみると、なんか自分に言われているように感じた。何でも一人で悩まず、兄弟姉妹に打ち明けたら、助け合うことが大事だと思いました。

島しづ子牧師のメッセージを聞いて、色々な試練にあいながらも頑張ったり、また周りの人達に助けを求めているところがすごいと思いました。色々な婦人会の方達に会えて良かったです。

モニカ 川満美佐枝

教会だより

屋我地聖ルカ教会

「堅信を受けて」

高校2年生の頃。友人に誘われ、初めて教会のクリスマスに参加しました。それまで宗教と無縁だった私は内心ドキドキで、緊張と不安でいっぱいでしたが、屋我地聖ルカ教会の信徒さん達は温かく迎え入れてくれて安心しました。それからは時々教会に通うようになりました。

教会ではみんなで聖歌を歌ったり、イースターやクリスマス・イブ礼拝などのイベントが全て初めての経験でも楽しかったです。数年通っていましたが、洗礼を受けるにはまだ自信がなく、中途半端な気持ちではいけないと思ひなかなか決意することができませんでした。そんな時、高司祭とマリアさんが韓国に帰ることを知り「何か恩返しをしたい。クリスチャンになりたい」と思い、洗礼を受ける事を決意しました。洗礼式の日には、知恵・叡智を意味



する「ソフィア」という素晴らしい名前をいただきました。堅信式の日、主教様の説教の中で、ローマ皇帝時代のソフィアと3人の娘たちの悲しい物語を聴きました。拷問を受けながらもキリストへの信仰を曲げない娘とその姿を励まし続ける母ソフィア。最後はみんな天に召されてしまいました。心が折れそうな厳しい状況の中でも信仰を曲げない姿に感銘を受けました。私の周りでは無宗教の方が多いため、クリスチャンと伝えると変わった目で見られる事もあります。私もソフィア達のように篤い信仰心を持ち、日々聖書の勉強も頑張っていきたいです。

ソフィア 吉田野愛

第75(定期)教区会後

第7回常置委員会報告

日時：2026年5月19日(火)
場所：教区センター会議室

I. 諸報告(教務局会より)

- ① 宣教部報告
 - ・ 5月19日、宣教部会を予定。
 - ・ 8月23・25日、教区中高生キャンプを予定。場所は未定。
- ② 総務部報告
 - ・ 4月27日、総務部会開催。慰霊の日礼拝の詳細について確認した。駐車証の発行、献金先等について話をした。
 - ③ 財政部報告
 - ・ 5月8日、資産運用委員会、財政部会開催。4月の資産運用状況と収支を報告した。
 - ・ 法人間異動時の初任者扱いについて。3法人間で話し合いの場を設ける必要がある。
 - ・ 「管理牧師手当について。」「管理牧師」について、まず教役者会で確認し、各教会の会計担当者にも説明、教会委員会と協議してもらい、必要があれば教区会で規定の変更を承認してもらう。
 - ④ その他
 - ・ 教区センターエレベーターリニューアル工事について。業者に詳細を確認し、必要であれば臨時教区会を検討する。

- ・ 旧南静園聖ミカエル教会移譲について。南静園の室長が4月に交代になり、現在移譲についての引継資料を確認しているとのこと。

II. 主教連絡

- ・ 2027年10月にCCEAが沖縄で開催される予定。窓口は管区事務所だが、沖縄教区も手伝いをする。
- ・ 新生会の原理事長が逝去され、弔意を表した。

III. 協議事項

- 1. 法律顧問契約料増額について。承認する。
- 2. 金光教の沖縄布教60周年記念祭について。祝金を上の工事が必要。
- 5. 臨時教区会(主教選挙)の日程を7月20日とする。

西日本宣教協働区「平和礼拝2026」

<神戸教区>

広島原爆逝去者記念聖餐式
8月6日(木)午前8時~ 於：広島復活教会

<九州教区>

長崎原爆記念礼拝
8月9日(日)午前10時30分~ 於：長崎聖三一教会

憶えてお祈りください

西日本宣教協働区「祈りのつどい」

神戸・九州・沖縄3教区の兄弟姉妹が互いを知り、祈りを共にすることで交わりを深めたいとするつどいです。どうぞご参加ください。

第39回：7月16日(木)19:00~

担当：沖縄教区

ZOOM ID : 468 123 1279

パスコード : 762780

